

「戦死墓」というメディア

——碑文から読み解くある日中戦争戦没者の足跡——

松野良一*

"Battle Graves" as Media: the Life of a Sino-Japanese War Victim through Tombstone Inscriptions

MATSUNO Ryoichi

This study aimed to reveal the memory of a soldier, who expired at the age of 25 during the Sino-Japanese War, by analyzing his tombstone inscriptions and belongings. Specifically, the life of a young man from a rural area who joined the military was analyzed, that is, how he fought in combat, passed away, and was memorialized. Through this, the intention of the study was to consider military service and war that young people could not avoid until the end of World War II. The main items investigated were (1) tombstone inscriptions related to the soldier, (2) records of military exploits and details of battles during the period from the soldier's dispatch to death, (3) army notebooks, (4) Miyakonojo Infantry 23rd Regiment Battle Records, (5) paintings published by the military relief department, (6) preserved photographs, and (7) mementos (belt bag, etc.). Additionally, the author visited the battlefields where the soldier fought. By doing so, the author tried to experience the ethos of the place. The field research in China was conducted in August 2019, before the outbreak of the coronavirus disease.

キーワード：戦死墓，武勲録，軍隊手帳，歩兵23連隊，日中戦争，遺品

Key Words：War Graves, Record of Military Exploits, Military Notebook, 23rd Infantry Regiment, Sino-Japanese War, Relics

はじめに

墓石はふつう、頭のでっぺんは平である。しかし現在では、数が少なくなってしまったが、中には、でっぺんが尖った墓がある。それらは、戦争で死んだ兵士を弔う墓で、戦死

* 中央大学政策文化総合研究所研究員，中央大学国際情報学部教授
Research Fellow, The Institute of Policy and Cultural Studies, Chuo University; Professor,
Faculty of Global Informatics, Chuo University

墓、戦争墓、あるいは戦没者墓などと呼ばれている。旧日本軍関連の戦没者墓地、寺の境内に建てられた戦死墓は、公的あるいは公益的な管理者がいる。それとは違って、江戸時代ごろから続く土着的な墓地に建てられた戦死墓は、その数が急速に減っている。特に日中戦争時代の戦死墓は、最近ではほとんど見かけなくなった。

この戦死墓と呼ばれるものの中には、墓石の側面に戦死日時、戦死場所、戦死状況などが記載されているものもある。本論考は、ある日中戦争戦没者の墓碑、遺品というメディア（媒介）を頼りに、地方出身の1人の若者が入営し、軍隊生活を送り、実戦でどう戦い、戦死し、その後どう慰霊されたのか、について足跡を追ったものである。それによって、当時の若者が避けて通れなかった兵役、戦争というものについて、考察してみたいと考える。

なお、主な調査対象としたものは、戦没者関連の①墓石、②武勲録（出兵から戦死に至るまでの期間において、武勲があった作戦と戦闘内容を記したもの）、③軍隊手帳、④『都城歩兵第二十三聯隊戦記』（以下、『連隊戦記』）、⑤陸軍恤兵（じゅっぺい）部発行絵画、⑥保存写真、⑦遺品（革製ベルトバッグ、紙幣）などである。また、本人所属の部隊が移動したと思われる場所についても、可能な限り現地を訪れ、土地の雰囲気を感じ取る努力をした。中国における現地取材については、新型コロナウイルス感染症の発生前の、2019年8月に行った。

1. ある日中戦争戦死者の墓

筆者が小学生の頃、つまり1960年代の話だ。母方の郷里に墓参りに行くたびに、不思議に思っていたことがある。墓石には通常、「〇〇家の墓」「〇〇家累代の墓」と刻まれている。しかし当時は、墓地内にいくつか、個人名の墓が立っていた。墓銘には「故陸軍歩兵〇〇之墓」という具合に書かれ、兵士個人の墓であることが明確であった。墓所全体には80基ほどの墓が存在し、うち5基ほどは戦死墓であった。

筆者の伯父（母の兄）の墓も、個人の墓として立っていた。墓碑には、「故陸軍歩兵軍曹 勲七等・功六級 松野浅一之の墓」（「浅」は旧字体であるため、以下「浅」とあった。墓石のてっぺんが尖っており、地上から3メートルほどあり、掃除するのが大変なぐらい高かった。

その後、周囲の「戦死墓」はいつのまにか無くなり、2023年2月現在は伯父の墓石一基だけとなってしまった。地震や地盤の緩みで傾いた場合、修正するのにお金がかかる。さらに、「〇〇家の墓」としてまとめたほうが掃除しやすい。個人の墓を引き継ぐ人がいない、などの理由で減ってしまったのだと思われる。



写真1 浅一氏の「戦死墓」。現在は台座を一段地中に埋め込み管理している = 宮崎市内で筆者撮影

この「戦死墓」について、ずっと不思議に思ってきた。なぜこんな墓が建立されたのか、なぜ普通の墓に埋葬しなかったのか。また、なぜ墓石に戦死の経緯が刻まれているのか、などである。筆者の研究室、ゼミでは、これまで戦争の記憶を掘り起こし、記録・保存し、それを後世に残す活動をし続けてきた。書籍化された『戦争を生きた先輩たち』（全2巻）『戦争の記憶をつなぐ』（中央大学出版部）などのほか、現在進行している『特攻と中央大学』などがある。これらのプロジェクトを進める中で、この伯父の「戦死墓」が気になり、今回、調べておきたいと思った。身内の話で恐縮だが、中国戦線での貴重な資料も残っていることもあり、簡単に紹介しておきたい。論文、論考というにはまだ材料および調査不足である。しかし、国内外の「戦死墓」に関する調査のきっかけとしたいと考え、今回は遺品を頼りに、戦死者の足跡をたどることにした。

この墓碑には、左側面から後面に回り込むように、戦死した経緯が記してある。

ルビ、西暦、旧字体のうち読みづらい字は（ ）の中に新字体、を筆者が補足し、読みやすくした。

君ハ（中略）今次支那事変勃發スルヤ召サレテ歩兵第二三聯隊ニ應召 第四中隊第二小隊軽機関銃手トシテ昭和一二（1937）年八月八日勇躍征途ニ發ツ（中略）噫惜シクモ漢口攻略戦ノ途次 廣濟（広濟）付近ノ激戦ニ於イテ奮戦中敵弾ノタメ重傷ヲ負ヒ 入院加療中遂ニ戦傷死ヲ遂クルニ至ル 悼ミテモ餘リアリ 茲ニ特ニ奉セル武功ヲ記シ英靈ニ捧ケントス

昭和一三（1938）年一〇月一日 歩兵第二三連隊第四中隊長

陸軍歩兵中尉 井上良忠



写真2 墓石の左側面から背面にかけて、出征から戦死までの経緯が彫り込まれている＝筆者撮影

この墓石の碑文とは別に、井上良忠中尉直筆の「武勲録」なるもの、および軍隊手帳が保存されている。それによれば、浅一氏は昭和12（1937）年10月に河北省趙州城攻略戦、同年12月に江蘇省南京城攻略戦を軽機関銃手として戦っている。そして翌13年9月5日、漢口攻略作戦の途中に湖北省広濟付近（現在の武穴市付近）で中国軍と交戦。この際に、左肩甲部に重傷を負った。山西省九江第5兵站病院に搬送され治療を受けていたが、昭和13（1938）年9月16日午前11時に、戦傷死を遂げた。25歳だった。



写真3 井上良忠中隊長直筆による浅一氏の「武勲録」＝筆者撮影

2. 台湾歩兵第一連隊

中国戦線に投入される前は、どういう生活をしていただろうか。戸籍や軍隊手帳を調べると、次のようなことがわかった。

浅一氏は大正2（1913）年2月6日生まれ。宮崎市内の尋常高等小学校を卒業後に、父である松野倉兵衛が経営する酒類販売業に従事していた。昭和7（1932）年12月1日に、台湾歩兵第1連隊第12中隊に入営。翌年6月1日に歩兵一等兵に、12月6日に上等兵に昇進している。昭和9（1934）年10月21日まで兵役に就いた後、予備役に、昭和10（1935）年に、簡閱点呼^{かんえつてんこ}を受けて、いつでも軍隊に復帰できることが確認されている。

浅一氏の母親は早逝していたが、台湾で兵役中の昭和8（1933）年2月に、今度は父親の倉兵衛が不慮の事故で死亡した。台湾から急遽駆けつけた浅一氏は、まだ小学生だった妹（筆者の母）を連れて、親戚の家に預かってくれるようお願いに行った。その際に、「松野姓」だけは変えてくれるなど頼んでいたという。



写真4 台湾で、戦車をバックに写真に写る浅一氏（左）＝筆者接写



写真5 浅一氏が送ってきた台湾の水牛の写真＝筆者接写



写真6 台湾でくつろぐ浅一氏（右から2番目）＝筆者接写

台湾に戻った浅一氏は、現地の写真を多数送ってきている。戦車をバックに写ったもの、水牛、同僚と一緒にのものなど、この時代には珍しく多様な写真が残っている。さらには、射撃大会で優秀な成績をおさめたとする数枚の表彰状も保存されている。

これらの写真を見ると、日中戦争が勃発する前の、まだゆとりのある雰囲気が伝わってくる。

3. 日中戦争の足跡

3.1 動員下令，出征

昭和12（1937）年7月7日夜に盧溝橋事件が勃発し、戦線は中国華北部に拡大していく。浅一氏の軍隊手帳には、同年7月27日動員下令と記されている。充員のため第23連



写真7 軍隊手帳と革製のベルトバッグ。中には朝鮮銀行券と軍票が入っていた＝筆者撮影

隊（都城）に応召。8月11日門司港を出発し、同日に釜山に上陸。朝鮮半島を経て、鴨緑江を渡り中国国内に。8月17日に山海関（現在、河北省秦皇島市）を出発し、19日には北京の南にある黄村に到着したとある。

軍隊手帳とともに、革製のベルトバッグが遺品として残されているが、この中には、朝鮮銀行券と軍用手票（軍票）が入っていた。これは、朝鮮半島滞在に使用するのためのものと思われる。

浅一氏の部隊は、北京近郊の黄村から南西方向に向かい、保定市、石家荘市へと進んでいく。浅一氏が最初に大規模な戦闘に出くわすのが、「趙州城」での戦闘である。石家荘市から約40キロ南西に位置する場所である。

この趙州というのは古来の呼び方で、中華民国に変わって以降、趙県という呼称に変わっている（1913年）。趙県は、河北省石家荘市の南東部に位置する県であるが、日本の県と違って、英語での表記は「town」「small city」とされるぐらいの大きさである。

この趙県には、隋朝の時代（595～605年頃）に造られたといわれる石造アーチ橋「安濟橋」（あんさいきょう、別名趙州橋）がある。現存する中国最古の橋でもある。筆者は2019年8月に、この場所を訪れたが、古代中国の建築土木技術のレベルの高さに驚くと同時に、今から82年ほど前、浅一氏も同じ橋を見たのだろうかと思像した。



写真8 隋朝時代に造られたという「安濟橋」（趙州橋）= 2019年8月（以下同）に筆者撮影



写真9 趙州城があった場所。現在は古城城址公園として整備されている = 筆者撮影



写真 10 土で構築された城壁には、まだ弾痕が残っていた＝筆者撮影

この橋の北方 2, 3 キロ付近に、激戦地となった趙州城がある。現在は、「古城城址公園」として整備されている。看板には、「古城牆遺址園」とあった。中に入ると、土で構築された城壁には、まだ弾痕がいくつも残っていた。

3.2 趙州城の戦闘

『連隊戦記』の表記には、こうある。() 内の説明は筆者が加筆。

(1937 年 10 月) 十一日二〇〇〇 (20 時) ごろ前衛たる第一大隊の先頭が趙県に接近したところ、突然城門付近から射撃を受けたので尖兵 (せんぺい, 先兵) 中隊の第四中隊は攻撃を開始し、敵と相対して夜を徹した。十二日朝第四中隊は西門を占領し、第一大隊は城内を掃蕩してこれを占領した。

一方、武勲録の最初に出てくる記載は、「趙州城攻撃」。戦闘時間は、1937 年 10 月 11 日午後 8 時から 12 日午前 9 時。本人の任務は、火戦分隊軽機関銃第 1 弾薬手後銃手、斥候兵。本人の行動の部分は詳細に記載がある。武勲録から一部引用する。12 日朝からの行動に関する部分。

翌十二日午前六時趙州城攻撃開始セラルルヤ 中隊ノ右第一線小隊火線分隊中ニアリテ西門ニ向ヒ前進シ 敵弾ヲ犯シテ西門外ニ達スルヤ城壁高クシテ爾後ノ攻撃困難ナリ 時ニ敵火益々熾烈ヲ極メ小隊長ハ突撃路ノ偵察ニ苦心アルヲ知り 進シテ最モ困難ナル突撃路ノ偵察ニ任シ敵弾雨飛スル中ニ毅然トシテ単身城壁ニ近迫シ 苦心偵察ノ結果有利ナル報告ヲ齎シ小隊長ノ突撃部署ヲ容易ナラシム 又小隊長ノ突撃ニ際シテハ先頭に立チテ城壁ヲ登攀シ器具ヲ以テ突撃路ノ開設ニ努カス 此ノ時敵トノ距離僅カニ十数米ニシテ敵ノ抵抗頑強ヲ極メ地ノ利ヲ得サル小隊ハ攻撃意ノ如クナラズ

此の間分隊ノ射手彈薬手三名敵彈ニ斃ル 上等兵ハ直チニ射手ニ代リ輕機関銃ヲ猛射シテ小隊ノ突撃ヲ支援シ遂ニ城壁ヲ奪取セリ（中略）

本戦闘ニ於ケル上等兵ノ勇猛果敢ニシテ剛膽ナル行動ハ 小隊長ノ戦闘指導ヲ容易ナラシメタルノミナラズ 中隊ノ戦捷に大ナル因ヲナセリ

斥候兵については、筆者は戦争を知らない世代であるために、映画のイメージしかない。弾丸が飛び交う中で、敵の状況や情報を探れる場所まで移動し、情報を収集した後に味方陣地まで戻り、その情報をもって次の軍事行動に生かす役割ということぐらいはわかっていた。

今回、趙州城跡地を実際に訪れたことを踏まえ、この武勲録の一節を読んでいると、非常に実感が湧いた。城壁は高く、上から弾丸が飛んでくる中を斥候に出るのは危険極まりなかったことだろう。輕機関銃とともに城壁を登ることが極めて難しいことは、現地を実際に訪れて初めて知ることができた。

内容を読み進めるとともに、リアルさが増すと同時に、痛々しい気持ちにもなった。戦闘状態においては、恐怖感も失せるのかもしれない。また、戦闘が厳しいものになればなるほど、双方に死傷者がでるのも事実だ。

3.3 南京城の戦闘

南京は1927年4月から、中華民国の国民党政府が置かれた場所である。日本軍は、この南京を占領すれば蒋介石政府は降伏するだろうとみていた。1937年12月13日に南京城は陥落した。しかし、蒋介石は、首都機能を武漢、さらには重慶へと移し、長期戦に持ち込んだ。重慶に移った国民政府はいわゆる援蔣ルートによって、英米ソなどから支援を受け、日中戦争は泥沼化していくことになる。

浅一氏は、南京城攻略の途上、南西部の高台にあった蚕業試験場から鉄道線路を経て房家園に至る付近で戦闘状態に入っている。『連隊戦記』には、こう説明がある。

第一大隊は十日^{ぶつぎょう}（夜明け）前行動を起こし、〇七〇〇ごろから第三中隊を主攻とし大隊主力をもって蚕業試験場高地に対して攻撃を開始した。（中略）大隊は第二、第四中隊を並列して房家園付近の敵陣地に対し攻撃を開始し、一九〇〇ごろ同陣地を攻略した。

一方、武勲録には、「南京城攻撃」とあり、戦闘時間は1937年12月10日午前6時から翌11日午後5時。本人の任務については、「左第一線分隊輕機関銃手トシテ鉄道線路上ノ



写真 11 南京城の西南角部分から少し右に移動した場所にある門。城壁には弾痕が多数残る
= 筆者撮影

敵陣地攻撃」。本人の行動については、こう記されている。

蚕糸改良場付近ノ堅陣ヲ突破シ 本道ニ沿ヒ潰走スル敵ニ猛射ヲ浴セ多数射倒シ 続
イテ敵ヲ急追シ小米行北端ニ進出セル時 敵ハ正面ヨリ乱射シ左側方至近距離ヨリ手
榴弾ヲ投シテ逆襲シ来リ 小隊ノ左翼ハ一時危殆きたい（危機の意味）ニ瀕セリ 此ノ逆襲
ハ全ク神速果敢ニシテ銃ヲ据フルノ暇ナク上等兵ハ全身ヲ敵弾ニ暴露シ軽機関銃ノ腰
試射撃ヲ以テ 敵ヲ難射ていしや（ちしゃ、左右に移動させる射撃）シ瞬時に二十数名ヲ射倒
シ敵ノ企図ヲ破摧はさい（破砕と同意味）シテ 逆襲ヲ排除シ小隊ノ危急ヲ救ヘリ

『連隊戦記』記載の地図によれば、この地は、南京城の中華門の南南西方向にあり、鉄道と道路が走りさらに高地という要衝であったことがわかる。この激戦を経て、12月12日に、約3キロ北方の南京城攻略へとつながっていく。23連隊の目標は南京城城壁の西南角となった。

『連隊戦記』によれば、城壁に対する破壊射撃が開始されたのが12日15時。野砲では全く効果なく、野戦重砲15榴（96式15ミリ榴弾砲）による砲撃で頑強な城壁も上部から崩れ始めたという。16時44分に西南角を占領。翌13日に城内に侵入し、「敵を掃討しつつ北方へ向かって前進した。敵兵はほとんど見ず住民も退避しており、大した銃砲声も聞くことなく……」と記載してある。

3.4 広済付近での戦闘、戦死

南京を占領したものの、蒋介石率いる国民党軍は武漢へ移動しており、降伏することはなかった。戦線はどんどん拡大していく。『連隊戦記』によれば、部隊は、南京市から長

江（揚子江）を上る形で武漢方面へと移動している。具体的には、南京市から蕪湖市、蕪湖市から潜山市、潜山市から黄梅市、黄梅市から広済市へと移動しながら戦闘を続けている。

広済という場所は、現在は武穴市と名前が変わっている。黄梅から広済までは、長江の流れに沿って町が続いているが、北側はすぐ近くまで山が迫ってきているだけでなく、平地にも様々な形の湖沼が点在するという自然環境である。国民党軍は、この地を武漢防衛の主陣地とし、推定3万の大兵力を配置していたという。この広済の戦闘で、23連隊が最も苦戦したのが、「敵陣地の中核とも言うべき」五峯山を巡る戦いだった（『連隊戦記』）。

浅一氏は、この五峯山の戦闘で負傷し後に死亡している。武勲録によれば、戦闘時間は、昭和13（1938）年9月5日午前8時30分から翌6日午前6時30分。本人の職務は、軽機関銃分隊長。本人の任務は、火線分隊長。本人の行動については、こう記載されている。

九月五日五峯山南方高地ノ戦闘ニ於テ 中隊ハ大隊ノ右第一線トシテ二木山ノ陣地ヲ



写真12 武穴市の南側を流れる長江（揚子江）＝筆者撮影



写真13 湖沼が多い広済付近。奥に広がるのは五峯山＝筆者撮影

奪取シ 西方ニ向ヒ戦果拡張中午後五時過キ猛烈ナル砲撃ニ呼応シ中隊正面ニ向ヒ数十倍ノ敵逆襲シ来リ 三、四十米ニ対峙シテ彼我（互いに、の意味）熾烈ナル手榴弾戦展開セラル 時ニ伍長ハ予備隊中ニ在リシカ命ニ依リ小隊と共に猛烈ナル突撃ヲ敢行シ 手榴弾ヲ投シテ数名の敵ヲ斃シ優勢ナル敵ノ逆襲ヲ排除セリ（中略）伍長ハ前後左右ニ炸裂スル手榴弾ノ中ニ在リテ部下ヲ叱咤激励 手榴弾ヲ投シテ近迫セル敵ヲ斃シ 或ハ自ラ軽機関銃ヲ以テ 強襲シ来ル敵ヲ猛射シ奮戦中敵弾ノ為左肩胛部介達銃創ヲ受ケ 命ニ依リ 徐ニ戦線ヲ退リ入院加療中 九月十六日午前十一時 惜シクモ戦傷死ヲ遂ケタリ

『連隊戦記』（344頁）に、第4中隊だった三浦松治氏が、戦友の最期について話をまとめている。それによると、部隊の兵士たちが負傷した際の様子は、異なる状況だったことが記載されており、真相は不明である。それによると、部隊は五峯山攻略の途中、二木山方面に向かって前進した後、お昼になったので昼食を取った。その直後に敵の砲弾が中隊に落下し、多くの兵士が戦死したり負傷したりしたという内容である。

「私は一番近かったので爆風で吹き飛ばされ、持っていた銃は真二つに折れていたが、幸（い）にかすり傷だけで身の不自由を感じなかった。あたりを見廻すと戦友達はほとんど負傷で倒れていたのです。元気で残ったのは図師上等兵と私、二人だけでした。横山重八上等兵、崎田照江上等兵、松野上等兵、尾田一等兵は重傷で後送されました」

この文章に出てくる松野上等兵が浅一氏かどうかは不明である。さらなる調査が必要である。武勲録にある「時ニ伍長ハ予備隊中ニ在リシカ命ニ依リ小隊と共に猛烈ナル突撃ヲ敢行シ」の「予備隊中」という部分は、部隊が昼食を取ったり休養したりする時間だったという意味であり、三浦氏の話と一致する。ただ、「伍長」と「上等兵」の表記違い、フ



写真14 日中戦争従軍時の写真。葬儀の際の遺影にもなった＝筆者接写

ルネームで記載がない点、さらには武勲録の記載と異なる点などについては、さらに調査を行いたいと考えている。

4. 戦 死 後

浅一氏が死んだことで、遺族は多忙な日々を送ることになった。浅一氏の妹の松野アキ子（筆者の母、1923年生）は、当時16歳で女学校の生徒であったにもかかわらず、様々な公的な行事に追われたという。

「まず、いろんな人が何日何日も挨拶にきました。葬儀は大がかりなもので、在郷軍人



写真15 浅一氏の葬儀。葬列は100メートル以上にもなったという＝筆者接写



写真16 遺骨を持つ妹のアキ子（左から3番目）。遺骨に息が吹き掛からないように大きなマスクを付けさせられたという＝筆者接写

会、愛国婦人会、県関係、市関係、小学生たちが参加してくれました。葬列は非常に長いものでした。あまりに行事が多すぎて、兄さんが死んだことを、ゆっくり悲しむ時間はありませんでした」

葬儀が終わっても、いろいろな事が続いたという。

「葬儀が終わると、今度は遺族が集められて、東京・九段の靖国神社参拝に行きました。九州から東京への汽車賃等の旅費は、国から支給されました。靖国神社参拝には全国の遺族が集まっていました。参拝後、班に分かれて少しばかりの東京見物もさせてもらいました。浅草寺、そして、歌舞伎も見ました。代々木の練兵場の兵隊さん（下士官）たちが案内してくれました」

いくつかの勲章類も贈られてきた。「支那事变従軍記章」「功六級金鷄勲章」「勲七等青色桐葉章」「軍人遺族記章」の4つだった。

さらに遺族向けに、慰問を主務とする陸軍^{じゅっぺい}恤兵部から、早田三四郎画伯謹筆と記され



写真17 左から「支那事变従軍記章」「功六級金鷄勲章」「勲七等青色桐葉章」「軍人遺族記章」＝筆者撮影



写真18 「遺児教訓」と題された絵画。「陸軍恤兵（じゅっぺい）部発行」と裏面に記されている＝筆者接写

た絵画が送られてきた。残っているのは、「天皇陛下靖国神社御親拝」「遺族靖国神社昇殿参拝」「遺児教訓」の3枚である。

筆者はこの3枚のうち、「遺児教訓」と題された絵画に、目が釘付けになった。それは、戦死した父親の遺影が床の間に飾られ、母親が子供たちに父親の遺書らしきものを見せながら説明している風景が描かれたものであった。

遺品である軍刀、飯ごう、トランクなども左側に描かれている。さらに、畳の上には、父親が買って送ったと思われる「世界偉人伝」という本が置かれているのが印象的である。

情緒的なものを伝えるには、活字より絵の方がダイレクトで効果的である。この絵は、「名誉の戦死であること」「父の意思を受け継いで、残された子供たちも本分を全うし、お国のために尽くすべし」というメッセージを伝えているように思える。ただ、眺めていると悲しさと虚しさが増してくる。

また、葬儀後しばらく経って、1人の女性が訪ねてきたという。

「兄は、台湾での兵役から戻って来た後、延岡市の旭化成で勤務しておりました。そこで結婚を約束した女性がいたらしく、その方が、葬式後に訪ねて来られました。兄が彼女に渡した名刺も戻ってきました。戦争がなければ、結婚して幸せになっていたのだらうと思いました」

おわりに

本論考を書くにあたり、浅一氏の「戦死墓」に隠された物語を、いろいろと調べてみた。これまで、一度もちゃんと見たことのなかった墓石、遺品、文書、などの資料をゼロから読み解くことになり、調査には3年間もかかってしまった。特に、それらのものは、何かを伝えようとするメディアであるにもかかわらず、それらを統合する物語は、なかなか見つけることができなかった。今回は、極力、事実関係だけの紹介に留めた。

小学生の頃、不思議に思いながら見上げていた「戦死墓」には、いろいろな意味が含まれており、その周辺にはいくつかの物語が存在していることがわかった。しかし、未だに不明な点、解明できない点も多数見つかった。今後も、調査を進めていきたいと考えている。

最後は、浅一氏の妹であるアキ子の次の言葉（2015年12月26日記録）で、締めくくりたい。

「兄さんが戦死して、国から手厚くしてもらいました。立派な葬式も出してもらいましたし、勲章もいただきました。それに、弔慰金ももらって、大変助かりました。だから、

国には感謝しております。靖国神社にも、何度も参拝しております」

「でも、やはり兄さんが生きてくれたらなああと、毎日思います。母親と父親を早く亡くして、兄さんだけが身内でした。優秀で優しい兄さんでした。亡くなってからというもの、寂しくて悲しい毎日で、兄の写真を見ては涙しました。兄さんは痛かっただろうと可哀そうで、今でも仏壇の遺影に話しかけています。これから先、二度と戦争が起きず、平和でありつづけて欲しいと思います」

参考文献

(論文)

- 稲垣大紀 (2006) 「南京事件—事件の究明と論争史」『東洋英和大学院紀要』第2巻, 121-135頁
別府三奈子 (2019) 「戦傷のメディア・エスノグラフィ：行間を読み取る過程についての一考察：事例研究 佐世保釜墓地戦没者追悼式」『社会志林』第66巻, 法政大学社会学部学会, 1-41頁
横山篤夫 (2008) 「戦没者の遺骨と陸軍墓地：夫が戦没した妻たちの60年後の意識から」『国立歴史民俗博物館研究報告』第147巻, 93-131頁
芳井研一 (2015) 「日中全面戦争期の戦争難民問題」『環東アジア研究』no.9, 1-17頁

(書籍)

- 明石岩雄 (2007) 『日中戦争についての歴史的考察』思文閣出版
井上寿一 (2018) 『日中戦争 前線と銃後』講談社
笠原十九司 (2017) 『日中戦争全史 上巻, 下巻』高文研
小林英夫 (2007) 『日中戦争 殲滅戦から消耗戦へ』講談社
波多野澄雄他 (2018) 『決定版 日中戦争』新潮社
都城歩兵第二十三聯隊戦記編集委員会 (1978) 『都城歩兵第二十三聯隊戦記』(非売品)
森山康平 (2017) 『図説 日中戦争』河出書房新社
(資料)
井上良忠 (1938) 『武勲録 故陸軍歩兵軍曹松野淺一』